18　次の文章は、江戸時代中期の文学者、荒木田麗女による怪異物語集『』の「飛頭蛮」の一節である。陸奥の守は、最近、屋敷に仕え始めた、美しい奉公人の女のもとに忍んで行こうとしている。これを読んで、後の問に答えよ。

〈名古屋大〉二〇二三年度出題

　せちにゆかしくて、その夜、人しづまるほどに忍び行きつ。この人はにはあらず、ひさしなる一間にただ一人寝たるを、いとうれしう心ときめきして、やをら近う伝ひ寄れど、いとよく寝入りつるにや、おどろくこともなし。上なる衣を押しやれど、やとも言はず。几帳のすきまより通ふ火影も、ことにおぼおぼしきに見れば、肌へはあたたかにしてうとましうもなけれど、かしらはなきやうなり。いと怪しうひがめにやと思へど、心もとなければ、を少し上げて見るに誠になし。にはかにむくつけうもあへなくも思へば、人々起こして聞こえむとすれど、わがをこがましきふるまひのあらはならむがわづらはしう、またこの人の気はひもあやしければ、あいなきぬれ衣もやきむとうしろめたくて、①立ち帰らむとするに、さすがにらうたかりし日ごろのおもかげも忘れがたく、アかへりみせられたり。

　さりげなくわが方に入りふしつれど、イまどろまれず。なほ心にかかりて、いかなる者のしわざならむ、ろなう館の内のをのこどもの中にこそあらめ、Ⅰけさう人のつれなく心こはきをうらみてかくはしつるにや、またⅡこと心あるを知りて、もとつ人のしつることにやなど、ひとかたならず思ひつつあるに、からうじて明けぬ。

　人々起き出でぬるやうなれど、また聞こゆることもなし。守もいそぎ起きて見るに、女、例のさまにて何心なくの方に居たり。守、いと怪しう、とばかりうちまぼりゐるに、かはりたるさまにもあらず、ただ世のつねなり。いぶかしう、われいかなる夢をウ見つるならむと思ふも、あやなくて胸うちさはぎたり。されど人に言ふべきならねば、北の方にさへ聞こえず。心の中には暮れにこそはと、こりずまに待ちわたるめり。

　その夜もまた同じごとなりければ、いよいよ世づかずの者にやと思ひなるには、らうたくおぼえし心も引きかへ、むくつけうさへなりて、②とみにかへりぬ。

　今夜は守の子なる児のにはかに泣きて、つだみなどしつるとて、北の方もも起き出て、打ちまき散らしなど、らうがはしく人々も立ち騒ぎなどして、かの人も起こしてむとて、ふとさし寄り見つけつつ、いといたくおびえてあきれまどひたり。人々にも聞こゆれば、守も今聞きたるやうにて、③行きて見などしたり。暁になりぬるにや、鐘の音も聞こえたり。いづくよりともなく、空よりかの女のかうべ、耳をつばさのやうにて、鳥か何ぞとまがふばかり飛び来たれるものか、ある限りの人おぢまどひて、物もおぼえずうつぶしふしたり。守はどうもなく太刀を引き寄せて見ゐたるに、やがてふしたる枕の方に行きけるが、とばかりあれば、女、何心なく起きて、人々のここにあるを、はしたなく恥ぢらひたるさま、さらにおそろしげなくらうたげなり。守、人々にもめくばせつつ、Ⅲ何ごともな言ひそとて立ちぬ。

　北の方、女ばらはひたぶるにおそれをののきつるも心ぐるしう、守もこの人さてあらせむも、あいぎやうなく思ひなりて、まかでさせむとしたり。女、かかることはつゆ知らで、ほどもなくまかでぬることの人わらへに恥づかしう、ここにても北の方、うらなき心見え給ひしに、かうにはかなるは、守のたはぶれ言などし給ふを聞きつけて、心おき給ふにやと、いと恥づかしう思ひ乱れて、まかづとて、日ごろ住みつる方のに、

　　名もつらきが島のやどりとてかくてへだつる道となりぬる

真木の柱は、と書き付けたるを、北の方もＡさすがにあはれと見けり。守も今はと行くを見るには、ただならず涙ぐましうゐたるに、女はただこの人の心のあやなさにかかることとのみ思へば、うらめしくて、

　　あだ波のかからざりせばあまうらよりにへだてしもせじ

とほのかに聞こゆるを、さは北の方などのじつることと思ふにやと、Ｂいとかたはらいたし。

【注】　○飛頭蛮―首が抜けて宙を飛び回る怪異。

○守―陸奥の守のこと。

○ろなう―「論無く」の転訛。

○つだみ―乳児が乳を吐くこと。

○御達―貴族の家に仕える、身分の高い女房。

○打ちまき―魔除けのためにまく米。

○どうもなく―動ずることなく。

○籬が島―陸奥の塩竈の近くにある小島で歌枕。

○真木の柱は―『源氏物語』真木柱の巻で、邸を立ち去ろうとする姫君が「今はとて宿れぬともれきつる真木の柱はわれを忘るな」という歌を残した話を踏まえる。

問１　波線部ア～ウについて、品詞分解して文法的に説明せよ。

問２　傍線部①～③について、なぜそのようにするのか、心情を説明せよ。

問３　破線部Ⅰ～Ⅲについて、適宜言葉を補いつつ、現代語訳せよ。

◎問４　二重傍線部Ａ・Ｂについて、なぜそのように感じたのか、直前の和歌の内容を踏まえて、理由を説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　ア＝「かへりみ」は名詞、「せ」はサ行変格活用動詞「す」の未然形、「られ」は自発の助動詞「らる」の連用形、「たり」は完了の助動詞「たり」の終止形。

イ＝「まどろま」はマ行四段活用動詞「まどろむ」の未然形、「れ」は可能の助動詞「る」の未然形、「ず」は打消の助動詞「ず」の終止形。

ウ＝「見」はマ行上一段活用動詞「見る」の連用形、「つる」は完了の助動詞「つ」の連体形、「なら」は断定の助動詞「なり」の未然形、「む」は推量の助動詞「む」の連体形。

問２　①＝陸奥の守は、Ａ忍んで行った女の頭が無いのが不気味でどうしようもなかったが、Ｂ他の人を起こせば自分の行動を知られるのが煩わしく、またＣ濡れ衣を着せられるのも気がかりだったため。

それぞれ同内容可。

Ａ＝３／Ｂ＝３／Ｃ＝４

②＝Ａ前夜に続いて女の頭が無かったので、いよいよこの世の者ではなく、Ｂ化け物であると思うようになり、Ｃ愛しいと思う気持ちが冷めてしまい、気味悪くもなったため。

Ａ＝３〔二晩続けて女の頭が無かった、という状況の説明が必須。〕

Ｂ＝３〔「化け物」「怪異の者」などの言葉が必須。〕

Ｃ＝４〔陸奥の守の、女に対する心情の変化を説明できていないものは不可。〕

③＝Ａ年老いた女房が女の頭が無いことに気づき、えて人々に知らせたので、  
Ｂ陸奥の守は今初めて知ったふりをすることで、Ｃ無関係を装おうと考えたため。

それぞれ同内容可。

Ａ＝３／Ｂ＝３／Ｃ＝４

問３　Ⅰ＝Ａ女に思いを寄せる男が、Ｂ冷淡で強情な女を恨んでＣ首を斬ってしまったのであろうか、

Ａ＝２〔「の」を主格で訳していないものは不可。〕

Ｂ＝４〔「女が薄情でつれないのを不満に思って」なども可。〕

Ｃ＝４〔「かく」の内容を明示していなければ減点２。〕

Ⅱ＝Ａ女に浮気心があることを知って、Ｂ元の恋人が女の首を斬ってしまったことであろうか

Ａ＝５〔浮気の主体を「女」としていないものは不可。〕

Ｂ＝５〔「しつる」の内容を明示していなければ減点２。〕

Ⅲ＝Ａここであった怪異現象について、Ｂ女本人には何事も言うなとＣ屋敷の人々に言い置いてＤ陸奥の守は立ち去った。

Ａ＝２〔「女の首が抜けて宙を飛んでいた」など具体的な解答も可。〕

Ｂ＝３〔禁止の訳が必須。「女（本人）に」がないものは減点２。〕

Ｃ＝２／Ｄ＝３

問４　Ａ＝Ａ女が障子に書いた、浮気を疑われ屋敷を離れるのがつらいという歌や『源氏物語』にある歌をＢ見た北の方は、化け物とはいえＣ教養ある女が暇を出された理由を誤解したまま出て行くのを気の毒に思ったから。

Ａ＝５〔「『源氏物語』にある歌（の一部）」など、女の教養の高さ、優雅さを示すものに触れていなければ減点２。〕

Ｂ＝２〔「北の方」という主語、「化け物とはいえ」という内容は必須。〕

Ｃ＝３〔「化け物だから暇を出したとは知らずに出て行く」なども可。「気の毒に思った」という内容が必須。〕

Ｂ＝ Ａ「あなたの浮気な言動がなければ屋敷を出ずに済んだ」という歌を聞いて、Ｄ陸奥の守は、Ｂ女が、Ｃ暇を出された理由を、自分が化け物だからではなく北の方の嫉妬によるものだとＢ思い込んでいるとＤ理解し、きまり悪く思ったから。

Ａ＝２〔歌が、陸奥の守の浮気な言動がなければ屋敷を出ることはなかった、という内容であった説明が必須。〕

Ｂ＝２〔「女」が「思い込んでいる」「誤解している」という内容が必須。〕

Ｃ＝３〔「北の方の恨み・嫉妬により暇を出された」という内容が必須。〕

Ｄ＝３〔「陸奥の守」がＡ（女の歌）から、Ｂ・Ｃを理解して「きまり悪く」「苦々しく」思ったという内容が必須。〕

【現代語訳】

　（陸奥の守は）しきりに心引かれ、その夜、人が（寝）静まるときに忍んで行った。この女は（＝独立した部屋）にはおらず、（＝寝殿造の母屋の外周に連なる部屋）の一間にただ一人で寝ているので、守はとても嬉しく心をときめかせて、静かに傍近く伝い寄ったが、（女は）たいそうよく寝入っていたのだろうか、目を覚ます様子もない。上にかけた衣を押しのけたが、何も言わない。几帳の隙間から漏れ入る明かりも、たいそう頼りないところで（目を凝らして）見ると、肌は温かくて不気味な感じではないが、頭が無いようである。とても疑わしく見間違いであろうかと思うけれども、気がかりなので、を少し上げて見ると本当に（頭が）無い。（守は）急に不気味にもどうしようもなく思ったので、人々を起こして告げ知らせようとするけれど、（そうすると）自分の（女のもとに忍んで行ったという）愚かな振る舞いがわになるのが面倒で、また女の様子も不審なので、（自分が女を殺害したという）つまらない濡れ衣を着る（ことになるの）だろうかと気がかりで、立ち帰ろうとするが、そうはいっても愛おしかった日頃の（女の）面影も忘れ難く、自然と振り返って見た。

　さりげなく自分の部屋に入って横になったけれど、うとうとと眠ることもできない。やはり（女のことが）気になって、「どのような者の仕業であろうか、言うまでもなく屋敷の中の男どものうち（の一人の仕業）であろうが、（女に）問３Ⅰ思いを寄せる男が冷淡で強情な女を恨んでこのようにしてしまったのであろうか、それとも（女に）問３Ⅱ浮気心があることを知って、元の（恋）人がしてしまったことであろうか」などと、一通りでなく思いながら過ごすうちに、ようやく（夜が）明けた。

　人々が起き出した気配であるが、それから（騒ぎが）聞こえてくることもない。守も急いで起きて（様子を）うと、女は、いつものように平然と台所のほうにいた。守は、たいそう不審に思って、しばらく（女の様子を）じっと見守っているが、変わった様子でもなく、ただ平常どおりである。不審で、「昨晩私はどのような夢を見たのであろうか」と思うものの、わけもわからず胸が打ち騒いだ。そうではあるが人に言えることではないので、北の方にさえ申し上げない。心の中では「今夜こそは」と、性懲りもなく待ち続けているようだ。

　その夜もまた同じ様子であったので、いよいよこの世のものではなく化け物であろうかと思うようになったので、愛しく思っていた気持ちもすっかり変わって（しまい）、気味悪いとさえ（思うように）なって、すぐに帰ってしまった。

　その夜は守の子である乳児が急に泣き出し、乳を吐いたといって、北の方も身分の高い女房たちも起き出して、魔除けのためにまく米をまき散らすなど、やかましく人々が立ち騒いで、あの奉公人の女も起こそうと言って、年老いた女房がちょっと（女の寝ている庇の間に）近寄って（頭の無い女を）見つけては、このうえなくひどくえてどうしてよいかわからなくなっていた。人々にも知らせ申し上げたので、守も今聞いたように装って、行って見るなどした。夜明け前になったのであろうか、鐘の音も聞こえてきた。どこからともなく、空からその女の頭が、耳を翼のように（広げて）、鳥か何かかと見間違えるばかり（の様子）で飛んで来たではないか、その場に居合わせた人全員がひどく怯えて、何も考えられなくなってうつぶせに伏してしまった。守は動ずることなく太刀を引き寄せて見守っていたが、（女の頭が）そのまま（体が）寝ている枕のほうに行ったが、しばらくすると、女は、平然と起き上がって、人々がその場に（集まって）いるのを（見て）、きまり悪そうに恥じらっている様子は、まったく恐ろしいさまではなくかわいらしい。守は、人々に目配せしつつ、問３Ⅲ「何事も言うな」と（屋敷の人々に）言い置いて立ち去った。

　北の方、女房たちはひたすらに恐れおののいたままなのも気の毒で、守もこの女を（化け物であることを知りながら）そのまま仕えさせるのも、思いやりに欠けると思うようになって、（里に）退出させようとした。女は、こういうことはまったく知らないで、（奉公してから）時間があまり経っていないうちに（屋敷を）退出してしまうことが人に笑われるほど（みっともなくて）恥ずかしく、ここでも北の方は、心に思っていることをつつみ隠さず見せてくださっていたのに、こう（心変わりが）急であるのは、守が（自分に）冗談などをおっしゃるのを聞きとがめて、（守の自分への浮気心を）気にかけなさっ（て、自分に暇を出す決断をなさっ）たのであろうかと、たいそうきまり悪く思い乱れて、退出する（から）ということで、何日か住んでいた一間の障子に、

　その名も冷淡な籬が島で暮らすように（堅く貞節を守って）この屋敷で働いてきたのに（自分の気持ちを疑われて）、このように隔てられることになってしまった（のがつらい）。

（と一首の歌を記し、その傍らに）「真木の柱は」、と（『源氏物語』「真木柱」の巻の歌を）書き付けたので、北の方もそうはいってもやはり気の毒だと感じた。守も「それでは」と（女が）出て行くのを見るには、並々でなく涙ぐましくいたけれども、女は「ただこの人（陸奥の守）の理不尽な心のせいでこのようなこと（になった）」とばかり思うので、恨めしくて、

　たいした風も吹かないのにやたらに立ち騒ぐ波（のような浮気な人の誘い言葉）がかからなければ、海人の乗る小さな舟（のような私）は浦から遠く離れた所へ隔てられることもなかっただろうに。

とほのかに詠み申し上げるのを、（守は）「さては北の方などが（嫉妬から）恨んだこと（が理由で屋敷を出ることになった）と思っているのであろうか」と、たいそうきまり悪く思う。